渡辺忠先生のご退職に寄せて

白鷗大学教育学部教授
伊　崎　純　子

渡辺忠先生は、この春白鷗大学でのご定年退職の日を迎えられました。在職期間は、満37年間となります。昭和・平成・令和の時代を白鷗大学一筋にお勤めくださいました。1986（昭和61）年４月白鷗大学経営学部ご着任直後より何と15年も教務委員を務め、カリキュラムを整え、経営学部１期生200名からこの大学を育ててくださいました。2000年（平成12）年４月法学部への異動を経て、2007（平成19）年４月より2023（令和５）年３月末まで教育学部心理学専攻に所属されました。文字通り長年にわたり、学生に対して「大学生らしい学問」の教授を行うのみならず、大学組織に対しても「大学らしい姿」という目標を掲げ、的確な方向性の提示にご尽力くださいました。まずは、教育者、大学人として、渡辺先生より賜りました本学への多大なご尽力ご貢献に感謝を申し上げます。

私は先生の長きにわたる在職期間の最後の数年間をご一緒させていただきました。渡辺先生が教育学部心理学専攻に在籍された2007（平成19）年より会議でお見かけするようになり、さらに自分自身が専攻長を拝命した2019（平成31）年より、メールのやりとりを中心に接点が増えました。正直に申しまして、私にとって、渡辺先生は近寄りがたい存在でした。先生は会議では常に末席を好まれ、静かにそこに居て、時に論理的に発言されました。スキンヘッドに大きめのサングラスから覗く眼光は鋭く強面で、筋トレの賜物と思われる若々しい体格にふさわしくかつては大型バイク、革ジャンで通勤されていたように思います。本学がセメスター制に変わる時にはおしなべて講義が半期２単位で揃っていく中、半期４単位を必要とする学問領域であることを訴える分厚い書類を元に難攻不落の教務課

を説得され、半期４単位を貫いたとのうわさも耳にしました。真偽の定かではない周辺情報は、渡辺先生が信念を堅持され学問にもご自身にも学生にも厳しい人であるという孤高なイメージ構築に十分なものでした。しかしながら、それらは先生に話しかける勇気のない私の勝手な思い込みでした。コロナ禍によるオンライン化はメールでやり取りすることに寛容でした。メールで教えを乞う私を渡辺先生は決して無碍にされることはなく、学生の教養教育、学生にとって何が一番重要かという視点からたくさんのことを教えてくださいました。

特に、心理学専攻長を拝命した時点の私は、そもそも当時の奥島孝康学長が掲げる「リベラルアーツ」が具体的にどのようなものを志向しているのかがよくわかっておりませんでした。「リベラルアーツ」の訳語は「教養」とされます。私の母校には「教養部」で全員が学ぶ仕組みがあり「パンキョー」の呼び名も知っていましたが、大学院に進学する頃には、教養部は廃止されました。何とか理解しようと闇雲にまず手に取ったのが『リベラルアーツの源泉を尋ねて』（絹川正吉著）でした。そのことを渡辺先生にお伝えすると、渡辺先生ご自身も絹川正吉先生や示村悦二郎先生に直接研究会やセミナーで学ばれたことを教えてくださり、選書は合っていたのだと大変ほっとしました。

今なお、「一般教育のあり方」を検討する責任部署や組織が不明瞭な点は本学の課題です。本学は鼎のごとく、法学・経営学・教育学の三学部で構成され、各学部専攻が主に免許資格に必要な「一般教育」教員を採用している一方で、各部局の「専門教育」の教員の意見が強くなりがちです。この問題を「クルド人問題」と称されたのは平田乃美先生で、的を射た例えに渡辺先生がメールで笑っておられました（「クルド人の渡辺ですwww。」とメールでいただいた時の驚き！）。一般教育を主に担当している先生が多数派であっても各学部学科に離散配属されているため連帯ができないことは、イデオロギー、宗派、言語が細かく分類可能なため各国にまたがって生活して国を持たないクルド人問題に例えられるそうです。心

理学専攻においても、心理学プロパーの先生方と社会科系の（免許に必要な科目を担当する）先生方に分断しやすい問題を内包しています。他の学部専攻でも同様のパワーバランス課題を抱えているかもしれません。社会科系の免許課程は心理学専攻だけではなく、法学部も経営学部も有しています。だからこそ、渡辺先生は所属先の変更をこれまで余儀なくされました。心理学の教員もまた、所属があるようでないように思います。心理学自体も一般教育に含まれます。それ故に、本学で心理学を担当する教員全員が心理学専攻に所属しているわけでもありません。これは、渡辺先生が置き土産とされた私たちに課された宿題です。

どうしても、技巧に走り足元だけに注意を払う狭量から学生や組織に迎合し、事なかれ主義に陥りやすい私にとって、時間や空間の拡がり、現代社会との関わり、実践と理論の往還という最高学府に相応しい「学問」のあり方と、学生に対する発達支援を目指した指針に言及される渡辺先生のご助言は私の進むべき道を照らす灯火でありました。

授業では数百ページにも及ぶ市販の教科書を凌駕するような資料を用意し、課外に哲学カフェを開催し、学生とともに「学問」を追究される配慮の細やかな渡辺先生は卒業生思いでもあります。心理学の非常勤講師を探しているときには一番に他大学で心理学研究者として活躍している法学部卒業生を推薦してくださいました。その卒業生は、今や我々の大切な同僚です。先生が静かにフェードアウトをされた後も、学生や卒業生は先生からいただいた学問の種を温め、各地で花開かせることでしょう。

このように振り返りますと、組織の一員だからこそ設置者の意向に黙従するのではなく、組織の行く末を自律して批判的に思考し、どのような知識とスキルを学生に習得させるべきなのか、自分自身が何を提供できるのかを真摯に考え発議する責務と姿勢を私は渡辺先生から学びました。今も、学んでいる最中とも言えます。

末筆になりましたが、渡辺先生、若輩者の私たちに対して丁寧なご指導をありがとうございました。白鷗大学への深い愛情で浅慮な私たち世代を

常に深く考えるように立ち止まらせてくださっていた先生世代が心理学専攻からいなくなることへの不安と寂しさを強く感じています。先生のますますのご健勝とご多幸をお祈りして、先生からいただいたたくさんの薫陶に心からの感謝を捧げます。

渡辺忠先生、ありがとうございました。